

「遺品整理」トラブル増加

業者倍増 高額請求や形見廃棄

核家族化や1人暮らしの高齢者の増加に伴い、故人の生前の持ち物を身内に代わって片付ける遺品整理業のニーズが高まっている。業界団体によると、関連業者は2年間で倍増したという。一方で、高額請求などのトラブルも起きており、課題が浮上している。

品▽廃棄物・リサイクル品——に分類し、遺族に渡したり処分したりする。廃棄物処理業者や「便利屋」が手がけるケースが多い。業界団体「遺品整理士認定協会」（北海道千歳市）によると、関連業者は全国に5000～6000社。協会が発足した2011年9月時点の約3000社から倍増した。業界の健全化を掲げて道内6業者で発足したが、

現在、趣旨に賛同する賛助会員は47都道府県の約120社になった。背景には、1人暮らしの高齢者の増加がある。厚生労働省のまとめでは、独居の65歳以上は12年は487万人で、02年の1・4倍だ。苦情も増加傾向だ。同協会の専用窓口への苦情・相談は、昨年5月の開設から3カ月間は月10件に満たなかったが、最近では月20件以上

に。高額請求が半数程度を占め、国民生活センターにも相談が相次ぐ。相場は、1LDKで12万～13万円以上▽3LDKで20万円以上——だが、東海地方の50代女性は昨年10月、亡母の遺品整理に130万円を請求された。近畿の80代女性は今年8月、妹の遺品整理で処分を頼んでいない羽毛布団や形見まで業者に持っていかれた。

トラブルを防ごうと協会は11年11月、遺品整理士の資格を創設した。独自作成のテキストやDVDを教材に約2カ月間、通信制で学び、レポートで所定の成績を収めることが要件だ。テキストでは、業務内容▽廃棄物処理法などの法制度▽作業

上の礼儀や心構え——を解説し、DVDには孤独死問題や法令順守に関する大学教授ら6人の講義が収められている。法的根拠はないが、10月末までに6491人が受講し3087人が取得した。ただ、高齢者問題に詳しい結城康博・淑徳

大教授（社会福祉学）は「遺品整理では、形見や遺書など遺族が手元に残したいものを探し出し、的確に仕分けることが大切だ。通信講座だけでこうした能力・感覚が身につくのかには疑問が残る。改善点が多い」と指摘する。【堀文彦】

「お悔やみの気持ち忘れずに」

兵庫県西宮市の廃棄物処理会社「リリー」の作業に同行した。同社スタッフは昨年1月、近畿で初めて遺品整理士になった。2011年4月に設置した遺品整理の専門部署には15人が所属し、うち10人が遺品整理

士だ。同市の6階建て市営住宅の一室。亡くなった住人は84歳の男性だった。3年前から寝た

きりの妻との2人暮らしだったが、今年4月に先立たれ、男性も8月にながんで逝った。市内に住む長男(56)が「自分だけでは到底片

付けられない」と依頼した。スタッフ6人が台所用品や食器を箱に詰め、タンスなどを次々と運び出す。テラーを営んでいた男性が仕立てた背広は、整理士の屋宜研次さん(61)が一着一着丁寧に折り畳む。食器などをリサイクルに回し、残りは廃棄する。5時間後、2トトラック5台半分の荷物が運び出され、部屋は空になった。男性は病院で亡くなったが、孤独死の現場は悲惨な場合も多い。屋宜さんは今年9月、愛知県豊橋市の2階建てハイツで孤独死した住人の遺品整理に携わった。部屋に異臭が残っており、作業後、屋宜さんの下着に臭いが染み付いていた。同じようなことが度々あるが、屋宜さんは「現場が過酷な状況の場合でも、故人の大切な品々を扱うので、お悔やみの気持ちを忘れず丁寧に作業するよう心掛けている」と話す。



テラーだった故人の部屋で作業する遺品整理士の屋宜研次さん。スーツを1着ずつ丁寧に箱詰める＝兵庫県西宮市で、久保玲撮影